C.G. ユングの旅
── 西欧近代相対化の試み ──

濵　砂　真　理

はじめに

精神分析医、心理学者であり分析心理学[1]の創始者であるカール・グスタフ・ユング（Jung, Carl Gustav 1875－1961）[2]は、精神科医として自我中心の一面的な生活によって心に病を生じた患者と接する中で、近代の自我中心のヨーロッパの自己克服を自身の課題とした。ユングは、当時のヨーロッパの自我中心主義、意識中心主義に対して、「自己」[3]という意識及び無意識領域を含んだ全体の中心を仮定した。さらにユングは、集合的無意識[4]という普遍的な、人類共通の無意識領域を仮定し、この無意識領域の意識化及び自己を目指す「個性化」[5]という過程が、ヨーロッパの自我中心主義、意識中心主義の克服にとって重要とした。

このヨーロッパの自我、意識中心の近代という思想は、いわゆる正統とされたキリスト教によって生み出されたものだが、他方、キリスト教には民衆の間で根強く信仰されてきた異端の流れがある[6]。さらに、近代が生み出した近代科学についても、その母胎でありながら次第に近代科学から排除されていった錬金術の流れがある[7]。ユングは、当時の形骸化してしまったキリスト教に対し、キリスト教が本来持っていた生き生きとした感動を異端の流れに見出すと共に、分析心理学理論と錬金術の対比可能性を見出した[8]。このように、ユングの分析心理学理論は、自我に対する「自己」、正統キリスト教に対する異端、近代科学に対する錬金術といった、いわば近代を相対化する可能性を切り開こうとするものであった。

本稿では、ユングが非ヨーロッパへの旅を通して得たものを検討することにより、ユングの思想形成に果たした旅の意義について検討する。

1．ユングの自己形成：臨床とユングにおける「創造の病」[9]

ユングは、その自伝の冒頭で「私の一生は、無意識の自己実現の物語である」（ユング1978, p. 17）と述べている。さらに、自身の思索と研究の中心は「自己」の概念であり、自ら創始した分析心理学の中心概念は「個性化」の過程であるとも述べている[10]。意識の中心としての自我ではなく、意識・無意識を含む全体の中心としての「自己」を実現する過程を重視したユングの一生は、それ自体が人間の全体性を目指した生涯であったといえよう。

以上のユングの分析心理学及び思想の源泉[11]を辿るにあたり、ここでは特に、ユングの病院での臨床体験とアンリ・エレンベルガー（Ellenberger, Henri F. 1905－1993）のいう「創造の病」－すなわち、ユング自身の無意識への取り組みに伴って出現した精神分裂病（統合失調症）[12]と見紛う程のユングの体験、及びその無意識への取り組みからの脱却に伴ってユングが獲得した無意識の創造的

側面－に絞って検討する

1.1. 精神科医としての臨床[13]

1900年、ユングはスイスのブルクヘルツリ精神病院に入局し、精神科医としてのキャリアを開始した。患者のために全てを捧げるような禁欲的な雰囲気の中、ユングはこの病院で患者の治療を行う精神科医としての臨床と研究の9年間を過ごした。

患者の身体を対象とする他の医学の分野と異なり、精神分裂病（統合失調症）患者の世界、すなわち、その夢や妄想、幻想の意味するものを理解し治療するということは、医学という科学的で合理的な方法で非合理的な世界を対象とするということである。その際にユングは、単に患者の症状を観察・記載・分類して診断名をつけるだけではなく、「いったい何が実際に精神病者の内面では起こっているのか」（ユング1978. p. 169）という強烈な疑問から始めた。ユングは、患者の抱く妄想を理解するために、専門の医学のみならず実に広範囲に及ぶ知識の領域を探索し[14]、「患者の妄想や幻覚の中に（ユングが「元型」archetype[15] と命名した）普遍的象徴が頻繁に出現する事実」（エレンベルガー 1997. p. 303）に気づいた。そして、ジークムント・フロイト（Freud, Sigmund 1856－1939）のいう無意識領域とは別に、もう一つの無意識領域（集合的無意識）の存在を仮定していった。

また、ユングはこの病院勤務医時代にフロイトと出会っている[16]。この出会い以前に、ユングはフロイトの『夢解釈』の内容と、自らが行った言語連想実験の結果の関連に関心を示していた[17]。「フロイトは、私の出会った最初の真に重要な人物であった」（ユング1977. p. 215）とユングに言わしめ、またフロイト自身も一時期ユングを自分の後継者と目するという二人の関係は、両者が訣別する1913年まで続いた[18]。

以上のように、ユングの自己形成の土台にはブルクヘルツリ精神病院時代に経験した、(1)患者治療のための妄想・幻覚理解の必要性、(2)患者の妄想・幻覚理解のための広範囲な知識の模索、(3)言語連想実験で確認した無意識領域の存在、(4)以上を理論化する上で大いに啓発されたフロイトの理論とその人となり、という4点が大いに関係していたと考えられる。それら4点を通して、ユングの関心領域は意識の世界から無意識の世界へ、自我中心から自己へと拡がっていったのである。

1.2. ユングにおける「創造の病」

ユングの自己形成に重要な役割を果たした出来事に、ユング自身の無意識との取り組みがある。ユングの、この取り組みの契機となったのが、フロイトとの訣別である。

フロイトとユングは、出会いの当初から頻繁に書簡を交わし、親密な関係を築いていった。フロイトの研究はユングに多くの示唆を与えたが、中でも、「フロイトの夢分析と夢解釈の技法は、分裂病的表現形態に貴重な光を投げかけている」（ユング1977. p. 212）ことをユングは発見した。しかし、ユングにはフロイトの精神分析理論の中の、エディプス・コンプレックスと性リビドー理論は受け入れ難いものであり、反面、この点こそフロイトにとっては絶対に譲歩できないものであった[19]。その後紆余曲折を経て、ついに1913年、フロイトからの手紙を最後に、私的には交際を絶った。ユングは、「私は私の知的独立性を犠牲にすること」（ユング1977. p. 227）ができなかったと述べている。フロイトという支えを失ったユングは、その時の心境を、後に以下のように自伝に書き記している。

フロイトと道を共にしなくなってから、しばらくの間、私は不確実感におそわれた。それは方向喪失の状態と呼んでも、誇張とはいえないものであった。私は全く宙ぶらりんで、立脚点を見出していないと感じていた。(ユング1978, p.244)

フロイトと訣別したことで、フロイトという師ともいうべき存在の他、多くの友人・知人がユングから離れていき、予測していたとはいえ、ユングは学問の世界で孤立していった。この状況は、精神科医であるユングが、3年ほど科学論文を全く読めなくなるほどの危機であった[20]。その危機に引き続いて、精神分裂病（統合失調症）と見紛うほどの圧倒的なイメージや幻想がユングに押し寄せ、ユングの無意識からのイメージや幻想との取り組みが始まった[21]。病院勤務の医師として、患者が自らの妄想や幻想に圧倒されて精神疾患を発病するという、その行き着くところを知っていたユングにとって、この体験は恐怖を抱かせるものであった。なぜなら、「私は自分自身に対する支配力を失い、空想のえじきとなることをおそれていた。そして、精神科医として、それが何を意味するものであるかをあまりにもよく知っていた」(ユング1978, p.254) からである。従って、ユングにとって自身の夢や妄想、幻想の意味するものを理解することは、文字通り必死の闘いであった。しかし、自分が行わないことを患者に期待できないこと、自分のためだけでなく患者のためにも無意識への取り組みを行いたいという確信が、ユングの助けとなった。

反面、フロイトと訣別後の約10年間は、単なる危機に終わらず非常に実り豊かな時期でもあった。この時期は、「私が自分の内的なイメージを追求していたころは、私の生涯において最も大切なときであった－つまり、そのときに、すべての本質的なことは決定された。すべてがそれから始まった」(ユング1978, p.283) という期間でもあった。このときの体験から得たものを、自身の学説・思想を形成する上での重要な素材として、ユングは自らの分析心理学の中心概念である自己 (self)、集合的無意識 (collective unconsciousness)、元型 (archetype)、個性化 (individuation) へと結実していった。

ユングが、「私の実験」と称する自らの無意識との取り組みを徐々に脱していったのは、1918年から1919年にかけて、ちょうど第一次世界大戦が終わりかけた頃である。当時戦争抑留英国人の収容所長をしていたユングは、毎朝ノートに小さな円形の絵を描いていた。いらだたしさや内的不調和があると、描いた円形の外縁の一部が破裂して、対称性が崩れた円が出来上がった。ユングは、図を描き初めた頃は、その円形が何であるかを知らなかったが、次第にユングは、それが曼荼羅（マンダラ）図形[22] というものであり、人格の全体性を表しているということに気づき始めた。

マンダラを描き始めてからは、すべてのこと、私が従ってきたすべての道、私の踏んできたすべての段階は、唯一の点－すなわち中心点－へと導かれていることが解った。マンダラは中心であることがだんだんと明らかになってきた (ユング1978, p.279)。

一九一八年から一九二〇年の間に、私は心的発達のゴールは自己であることを理解し始めた。それは直線的な発展ではなく、自己の周囲の巡行のみである。均一な発達は存在するが、それはたかだか最初のころだけで、後になると、すべてのことは中心に向けられる。この洞察は私に安定感を与え、私の内的な平和が徐々にもどってきた (ユング1978, p.280)。

このような体験は、ユングにとって「自我が最高の位置にあるという考えを棄てねばならぬことが立証されてきた」(ユング1978, p.279) 体験であり、「自己」が心の全体の中心であることを実感した体験であった。以上の体験を振り返って、80歳を過ぎたユングは、以下のように述べている。

> 精神科医である私が、私の実験のほとんどすべての段階において精神病の素材であったり、狂人の中に見出されるような心的な材料に出会わなければならなかったのは、もちろん皮肉なことであった。これは無意識のイメージの基金であり、精神病患者を致命的に混乱せしめるものである。しかし、これはまたわれわれの合理的な時代から消え去った神話的な創造の母体である (ユング1978, p.269)。

総じて、ユングが自身の無意識との取り組みの体験から得たものは(1)自我は意識の中心に過ぎない、(2)無意識は時に人を精神疾患に陥らせるほど破壊的であるが、同時に創造の源泉という側面をもつ、(3)無意識は近代の合理性が失った神話の母体でもある、ということであった。

さらに、以上のユングにとっての無意識世界への探求は、ユングに非ヨーロッパ圏への旅立ちを促した。

2. 旅の動機と背景

2.1. 動機

ユングの無意識世界への探求は、第一次世界大戦の時期と重なっていた。ユングは、当時高度な文明を有していながら戦争という行為を引き起こしたヨーロッパ人の心性を探る必要性を実感した。そのためにユングは、ヨーロッパというものを外から眺めるということに、つまり、実際にヨーロッパの圏外に出てそこで見えてくるヨーロッパ像にこだわった。それはユングが、「ヨーロッパとはあらゆる点で異なった環境の中に反映した、ヨーロッパのイメージを考えてみたい」(ユング1977, p.55) と望んでいたからであり、ユングにとっての最大の課題が、ヨーロッパ人の心性だったからである。そのために、ユングにとっては、当時未開社会と言われた地域に住む人々の心性を知ることが必要であった。さらにユングには、未開社会の人々と接して、無意識に関する知識を増やすという動機も存在していた[23]。

2.2. 背景

非ヨーロッパ圏への旅に出る以前に、ユングは精神科医としての臨床、ヨーロッパの子どもの夢の分析、アフリカの神話やアメリカ・インディアンの英雄神話の研究を通して、それらの人々の心性を研究する必要を既に認識していた。さらに、ユングの非ヨーロッパ圏への旅は、前述したようにフロイトとの訣別後の危機の時代 (創造の時代) を脱し、毎日のように描いていた曼荼羅 (マンダラ) の図が「自己」を表現していること、心の発達のゴールが「自己」であることを理解した後のことであった。またこの頃は、ユングは既にチューリッヒに心理学クラブを設立し、物理的には第一次世界大戦が終結し閉鎖されていたスイス国境が開かれていた[24]。

またこの時期は、ユングにとって分析心理学の理論構築の時代でもあった。ユングは、キリスト教から異端とされたグノーシスについて1918年から既に研究し始めており、ユング学説の中心概念とも

いえる「自己」の概念については、1921年出版の『心理学的類型』の中で既に論じていた。錬金術研究については1928年、中国学者のリヒャルト・ヴィルヘルム（Wilhelm, Richard 1873－1930）[25] を通じて知った中国の錬金術の書『太乙金華宗旨』との出会いは、ユングにとって決定的なものであった。こうした知的背景のもとで、ユングは以下の旅に出ることになる。

ここでは、特に印象深い旅としてユング自身がその『自伝』で言及している、北アメリカ大陸のプエブロ・インディアン居住地、及びアフリカ大陸への旅を取り上げてみたい[26]。

3．ユングの旅ー非ヨーロッパから見たヨーロッパ

3.1. 北アフリカへの旅[27] とその意義

3.1.1. 旅

1920年、ユング45歳の時に訪れた北アフリカが、初めて訪れた非ヨーロッパの国であった。商用でチュニスへ行く友人に誘われて同行した旅で、そこはアラビア語の世界、イスラム教の世界であった。アルジェ(アルジェリアの首都）からチュニス（チュニジアの首都)、次いでスース（チュニジアの都市の一つ)、サハラへというルートである。ユングは、アルジェから鉄道で30時間かけてチュニスへ行き、その友人とはスースで別れた後、砂漠地帯、ネフタのオアシスへと旅している。当時のアルジェリアは、1830年から進出したフランスが、1905年に支配を確立して15年後で、1954年から始まるアルジェリア戦争の34年前である。

初めて非ヨーロッパ圏に足を踏み入れた実感を、ユングは以下のように記している。

> ついに私は、ながらく望んでいた、非ヨーロッパの国に来た。そこではヨーロッパの言語は語られず、キリスト教的な考え方は浸透しておらず、ヨーロッパとは異なった民族が住み、異質の歴史的伝統や哲学が民衆の顔に刻みこまれていた。(ユング1977, p. 55)

さらに、この地でユングが抱いた印象は次のように続く。「このアフリカの信じ難いこと！〔中略〕残念ながら筋道立てて書くことはできません。というのは、何もかもがあまりにも多過ぎるのです」(ユング1977, p. 234)。

> アラビア人の町は古典的な古風さとムーア人風の中世的なグラナダ、それにバグダッドのお伽話。もう自分のことは考えられません。評価することのできない、尚さら、描写することもできない、この寄せ集めの中に、自分というものが溶け去ってしまうのです。(ユング1977, p. 234)

以上の、妻（Jung-Rauschenbach, Emma 1822－1955）宛ての手紙の文面から窺い知ることができるこの多様さや寄せ集めの中には、森、植物園、木々、気候と行った自然、そこに住むアラブ、アフリカ、インドといった人々とその色彩豊かな衣装、グラナダ、バグダッド、ローマといった建築様式の混在、そして、砂漠の生活などがある。

アラビア語を全く解しなかったユングは、アラブ人のカフェに一日中座ってアラブ人やヨーロッパ人を観察した。そこで気づいたことは、アラブの人々がヨーロッパ人と話すときの表情の微妙な変化

で、ヨーロッパ人が「東洋的静謐とか、無感情」(ユング1977, p. 56) と呼んでいる仮面の背後のいらだちや昂奮であった[28]。

さらに、時間がゆっくりと進行し、時に時間が逆行するような脅威を覚えたサハラでは、ユングには、「ここではすべてのものが、そうあるべきようにあり、今までもずっとそうであったように見えた」(ユング1977, p. 58) のである。このような時間感覚の変化の中でユングが抱いた感想は、時間と同義語の進歩が、ヨーロッパ人から取り返すことのできないものを奪い去り、その進歩の速力がヨーロッパ人の持続性をとり去った、というものであった。

> ヨーロッパ人はたしかに、もう数世紀以前の昔のヨーロッパ人ではないのだと確信してはいるが、しかしその間になにものになったか知ってはいない。時計がヨーロッパ人に告げていることは、いわゆる中世以来、時間と同義語である進歩がヨーロッパ人に忍びよって、ヨーロッパ人から取り返すことのできないものを奪い去ったということである。(ユング1977, p. 58)

> ヨーロッパ人はますます加速度を早めながらはっきりしない目標へ向かって彷徨の旅を続けている。重心の喪失と、それに相応して生じた不完全感をヨーロッパ人は、たとえば蒸気船、鉄道、飛行機、ロケットのような、彼らの勝利の幻想によって補った。(ユング1977, p. 58)

ユングは、初めてのアフリカの地で以上のような体験をしながら、「アフリカがほんとうに私に何を言っているのかわかりません。けれど、アフリカは話しかけているのです」(ユング1977, p. 236) と述べている。当時この体験の本性を理解できなかったユングは、他方、アフリカ再訪への痛切な願望を抱いてこの旅を終えたのである。

3. 1. 2. 旅の意義

この旅は、ユングにとって初めての非ヨーロッパ世界であった。アラビア語を解さなかったユングにとっては、現地の人々と直接語り合えた他の旅とは異なり、文字通り別世界であり[29]、多すぎるほどの、評価も描写もできない非ヨーロッパ的なものの寄せ集めの世界であった。いわば、ユングは一度に数多くの「非ヨーロッパ」に出会ったのである。さらに、その世界は秩序だった西欧世界とは異なっており、ユングには描写不能であり言語化が出来なかった。ユングは言語化が出来ないほど圧倒されたのだが、それはこの圧倒的な力が、無意識の世界からのものであることを示しているのである。

さらにユングは、自分がその混沌の世界に溶け去るようだとも綴っている。それは、ヨーロッパ精神の優越を感じることが避け得ないながらも、強烈に異邦人の部分を受け入れるという、ユングの激しい葛藤の体験である。ユングがこうした葛藤を抱いたのは、ユング自身が述べているように、アラブの人たちの生に密着した本性が「われわれがやっと克服した、あるいは克服できたと考えている歴史的な心の層に強烈で暗示的な影響を及ぼした」(ユング1977, p. 63) からに他ならない。このことは、実はヨーロッパも非ヨーロッパも、根底には同じ層、すなわち、集合的無意識の領域が横たわっていることを示すものであった。

しかも、ヨーロッパ人であるユングは、この層に「充足されていない願望とか、欲求とかに由来する」(ユング1977, p.63) 憧れを感じ、この充足されていない願望や欲求が、全体としての人間に必要なものであることを認識したのである[30]。

3.2. プエブローインディアン居住地への旅[31] とその意義

3.2.1. 旅

ユングがプエブロ－インディアンの居住地を訪れたのは、1924年ユング49歳の時である。北アフリカへの旅の後、4年後のことであった。ユングは、ここで初めて非ヨーロッパ人と話す機会をもった。

ここで出会ったタウス・プエブロスの村長オチウェイ・ビアノと、ユングはヨーロッパ人と話すよりもよく話し合うことが出来た。その村長がユングに伝えたのは、白人たちがいつも何かを求めて落ち着かずじっとしていないこと、自分たちには白人たちが求めているものがわからないということであった。そのような姿は、プエブロ－インディアンにとって狂者の姿に見えた。この会話の後、ユングは「誰かが私に対して真の白人像を描いてくれたのだ」(ユング1977, pp.68－69) と実感した。すなわち、ヨーロッパ人には見えなくなっている自己像を知らされたのである。そのユングが描いたヨーロッパの自己像とは、以下のようなものであった。

> われわれの観点から植民地とか、異教徒への宣教、文明の拡張などと呼んでいるものは、別の顔をもっている。つまり残忍なほどの集中力で遠くの獲物を探索する猛禽類の顔つきであり、〔中略〕われわれの紋楯を飾る鷲とか、その他の猛獣のたぐいはすべて、われわれの真実の本性を心理学的に代表するものとしてふさわしいと思われる。(ユング1977, pp.69－70)

次に、ユングが印象深い出来事として述べているのが、プエブロ－インディアンたちの落ち着いた静かなたたずまいと気品のようなものであった。その因って来る原因をユングは、彼らが父なる太陽の息子たちと自覚し、その宗教的儀式を自分たちのためばかりではなく全世界のために行っているという、その宗教的な生活に見た。ユングは、彼らの生活が宇宙論的意味を帯びていることを、ヨーロッパ人の生活と比べて次のように述べている。

> 彼の生活が宇宙論的意味を帯びているのは、彼が父なる太陽の、つまり生命全体の保護者の、日ごとの出没を助けているからである。もしわれわれ自身の自己弁明、つまりわれわれの理性が形成する生活の意味を、インディアンの生活の意味とを比べてみると、われわれの生活の貧しさを意識せずにはおれない。(ユング1977, p.75)

また、ユングは、彼らの宗教の秘儀に関する秘密保持の厳重さについて、「秘密保持はプエブロ－インディアンに自尊心と、白人の支配に抵抗する力を与えている。それが彼らに一貫性と統一性とを与えている」(1977, p.71) と言及している。

さらにユングは、プエブロ－インディアンの宗教的生活については、以下のように述べる。

神の圧倒的な働きかけに対して完全に応答でき、神に対してさえ本質的に反応できると感じることは、人間の個性を形而上的諸要素をもった威厳にまで引き上げる、矜持を抱かせる。「神とわれわれ」と並べて考えることが、たとえ無意識裡のことにすぎないにしても、この対等の関係がプエブロ－インディアンのただよわす羨ましいほどの悠然とした落ち着きを支えていることは確かであった。かかる人間は、文字通り、彼らのあるべき場所に存在しているのである。(ユング1977. p. 76)

ユングは、彼らの宗教観が理屈ではなく事実であり、重大で感動を伴うものであることを実感したのである。

3.2.2. 旅の意義

ユングがこの地で知らされたのは、プエブロ－インディアンから見た白人像、すなわち他者から見た自己像であった。これは、近代化の先頭を走る西欧には自分では見ることのできない姿である。見えてきたその姿とは、自らのあるべき場所を喪失し、猛禽類や猛獣といったシンボルが象徴するような攻撃的な本性をもつ自分たちヨーロッパ人の姿であった。

そのようなヨーロッパ人の探索（行為）の背後に潜む欲望の存在を、プエブロ－インディアンは理解できず、一体何を求めているのかと訝る。つまり、近代が成し遂げてきた際限のない欲望の肯定、その目的達成のための最も効率良い獲得法の選択、合理的な組織化、そして、その選択法を正当化する理論の形成といったことは、必ずしも普遍的ではない相対的なものであることを、ユングの旅は示唆している。

次に、「宇宙論的意味を帯びた」とユングが形容する、プエブロ－インディアンの宗教生活と秘密保持の重要性については、ユングはまず、その太陽神崇拝について触れている。つまり、太陽についての科学的な説明は、理性的なヨーロッパ人の目から見ればいくらでも可能である上、宗教に何ら神秘的なものを認めなくなって久しい目から見れば、世界のために自分たちが太陽の運行を手助けしており、そうしなければ世界は破滅するというプエブロ－インディアンたちの純朴さ、無邪気さに微笑みを誘われるかもしれない。しかし、ユングはそこに、ヨーロッパ人の生の貧しさ、貧困とみすぼらしさを見た。

宗教生活に関してユングは、プエブロ－インディアンたちの宗教儀式に関する秘密保持の厳格さに注目した。ユングによれば、集団の構成員によって共有された秘密が、「その部族の人間相互の強固なきづなとして役立つ」(ユング. 1977p. 194) ものであり、従って、この秘密の存在がプエブロ－インディアンの自尊心の拠り所であり、彼らに一貫性と統一性を与えているのである。しかし、集団で共有されたこの秘密は、「個人の人格内の結合力に対して有用な補償」(ユング. 1977p. 194) にはなるが、これは「個性化」に至る中間段階にすぎず[32]、自己という中心を目指すためにはさらに近代の自我中心主義、意識中心主義を離れ、全人格性を目指す道を進まねばならないとユングは考えた。

3.3. 東アフリカへの旅[33] とその意義

3.3.1. 旅

ユングは、50－51歳の1925年から1926年にかけて、ケニヤ、ウガンダを旅した。この旅はイギリス

からリスボン、マラガ、マルセイユ、ジェノア、エジプトを経由し、紅海を通ってモンバサに至る約一ヶ月の船旅であった[34]。ユングら一行はモンバサで二日間滞在し、その後ケニアまで一日がかりの列車の旅をした。ユングは、列車の車窓から眺めた風景[35]に強烈な既視感を抱いた。「私は青年時代の土地に戻り、五千年来私を待ってくれていたあの黒人を知っている」(ユング1977, p.78)と感じ、なぜかはわからないが、「あの黒人の世界が何千年もの昔から私の世界であったということを知っただけである」(ユング1977, p.78)と述べている。この「奇妙な感じ」は、アフリカの旅の間中ずっとユングにつきまとった。

続いて行ったアスイ草原でユングは、同行者と離れて一人でいるという絶対的な孤独感を味わう。

> この広大なサヴァンナの低い丘に立つと、驚くばかりの眺望がひらけていた。地平線のかなたにまで巨大な動物の群れが見えた。ガゼラかもしか、かもしか、うしかもしか、ゼブラ、いぼいのしし等の群れであった。草を食み、頭を上下にふりながら、獣たちは緩やかに流れる川のように、前へ前へと移動していた。肉食の猛禽があげるメランコリックな叫びのほかには、なんの物音もしなかった。永遠の原始の静寂があり、きっといつもそうであったように非存在の状態にある世界があった。(ユング1977, p.79)

アスイ草原で一人になったユングが気づいたことは、この世界を眺める存在としての、人間の意識の重要性であった。

> 世界に客体的存在が付与されていなかったら、世界は聞こえず、見えず、音もなく食べ、生まれ、死に、頭をうなだれて幾億年もの間の時が流れ、非存在の深夜のうちに、果てしない終局を迎えるであろう。人間の意識が客体的存在と意味とをはじめて創りだし、そしてそうすることによって人間は偉大な存在過程に不可欠な座を見つけるのであった。(ユング1977 p.80)

続いて一行は、キャンプ地となるエルゴン山へ向かう。ここに3週間ほどキャンプをして滞在した。毎晩キャンプの周囲からはライオン、豹、ハイエナの声が聞こえた。ユングは夜明け直前に椅子に座り、太陽が昇ってくる瞬間、さらにそれにひき続いて起こる出来事を眺めることを習慣とした。

> この地方の日の出は、日々新たに私を圧倒する出来事であった。劇的だったのは、地平線上に太陽が急に昇ってきたときの光輝よりも、それに続いてひき起こることの方にあった。〔中略〕まず、光と闇との対照がくっきりと鋭くなった。それから諸事物がはっきりとした形をとって光の中に現われ、光は緊密な輝きとなって峡谷を満たした。谷の上方にみえる地平線はまばゆいばかりに白らんだ。次第に輝きをましてくる光は諸物の構造にまで透過するように見え、〔中略〕すべてのものは閃耀する水晶に変容してしまう。〔中略〕このような瞬間には、私はまるで寺院の内部にいるような気がした。それは一日のうちの、もっとも聖なる時間であった。私は歓喜して飽くことなくこの光輝を眺めており、むしろ時を超越した恍惚にひたっていた。(ユング1977, pp.96－97)

ユングが気づいたことは、この太陽が昇ってくる瞬間が人間だけのものではなかったことである。近くにあった狒々のすむ懸崖では、日中は森の中で騒々しい狒々たちが、毎朝懸崖の尾根に身じろぎもせず太陽に向かって静かに座っていた。この姿を見て、ユングはエジプトのアブ・シンベル神殿の礼拝の姿勢をとった狒々のことを思い出す。

> 彼らはいつも、次のような同じ話を語っていた。昔からわれわれは、天空に輝く光として暗闇から立ち現れ、世界を救済する偉大な神を礼拝していたというのである。そのとき私は、人間の魂には始源のときから光への憧憬があり、原初の暗闇から脱出しようという抑え難い衝動があったのだということを、理解した。(ユング1977, p.97)

太陽が神なのではなく光の来る瞬間が神であること、それは瞬間の原体験であること、このことを現地の人々のことばからだけでなく、ユングは実感として体験した。また、ユングが発見したのは光の来る瞬間が神だということだけではない。ユングは、日中は陽気な現地の人々が夜や暗闇を恐れる場面に出会い、人間には光への憧憬があることも実感した。すなわち、ユングは人間には魂の光への憧憬があることを発見したのである。ユングはこのことから、人間には心の中の意識への憧憬というものがあり、無意識の暗闇に光が射すことはすなわち意識の始まりであるという洞察を得た。

ユング一行は、エルゴン山での楽しい逗留の終わりに重い心でキャンプをたたむ。現地の人々に再訪を約束したが、「その当時以来、カカメガスの近くで金鉱が発見され、採鉱がはじまり、マウマウ団の運動が無邪気で友好的だった土着民の間に起こり、そしてわれわれも文明の夢から急激に目覚まされた」(ユング1977, p.98) のであり、東アフリカへの旅は今回が最初で最後のものとなったのである。

3.3.2. 旅の意義[36]

ユングは、東アフリカの旅で直ちに既視感を抱いており、当初からこの地に惹かれるものがあった。そこは、人も動物も共に生きる大自然の中に身を置いている、いわば神話の世界であった。しかし、ユングはそのアフリカに惹かれながらも－それは無意識のもつ魅力でもある－、最後のところで留まり意識の重要性を再認識している。ユングは、光への憧憬、すなわち意識への憧憬の意味を理屈ではなく実感した上で、さらに、人類に共通で太古からのつながりを有する集合的無意識の意識化によって、自身のよって立つ基盤である歴史性を獲得し、集団に埋没するのではなく全体としての個人、つまり自己を目指すことが重要であると考えたのである。

また、ユングは、光の来る瞬間は聖なる時間であり、まるで寺院の内部にいるような時を超越した恍惚なる体験をしたと述べている。ユングにとって、これは宗教的体験であった。

4. ユングの旅の4つの意義

ユングが非ヨーロッパ圏へ旅したのは、ユング自身の「脱ヨーロッパ中心性を確実にするため」(河合1982, p.86) であるとの見解がある[37]。確かに、ユングは非ヨーロッパ圏への旅立ち以前に、近代の自我中心主義に対して自己や集合的無意識といった概念を論じており、ヨーロッパを課題とし

ていた。しかし、ユングの旅の意義は、ユング自身の脱ヨーロッパ中心性だけにあるのではない。私はこれに加えて、さらにユングは次の4点を旅で得たと考える。

以下、(1) ヨーロッパの客観視、(2)時間の感覚の変化、(3)神話の重要性、(4)意識の重要性の4点についてそれぞれを検討し、ユングの旅の意義について結論づけたい。

4.1. ヨーロッパの客観視

ユングは、旅に先立つ創造の病の経験で、自我ではなく「自己」こそが目指すべき中心であるとの認識を経験していた。ユング自身既に経験済みの、「自己」という中心への内面の旅を、非ヨーロッパへの旅という外面の旅で確信した。

当時のヨーロッパが絶大なる信頼をおいた正統キリスト教、近代科学、近代的自我に対して、それぞれグノーシス等の異端や東洋の宗教、錬金術、そして「自己」の概念や集合的無意識の概念を示すことによりそれらの相対化を、つまりは、西欧近代の相対化をユングが試みていった[38] ことを考えると、ユングにとっての旅は、ユング自身の理論構築・思想形成に役だった[39] というだけではなく、ユングが非ヨーロッパから見たヨーロッパ、すなわち、当時植民地下にあった非ヨーロッパを知り、他者から見た自己像を実体験した旅であったということができる。

4.2. 時間の感覚の変化

これらの旅でユングが体験したのは、ゆったりと流れる時間であった。一日を24時間とし、時計によって告げられる時間に追われるように生活するヨーロッパ人と、これらの旅で出会った人々が持つ時間は物理的には同じだが、両者が同じ時間を生きているとは言い難い。ヨーロッパ人は時計を持ち、時間をコントロールしているつもりでその実、時計にコントロールされていることをユングは実感した。

ヨーロッパでは時間と進歩が同義語であるから、時計で刻まれる時間とは未来に残されている時間であって、それは過去が断ち切られた時間である。しかし、ユングがその旅で体験したような時間感覚の中では、時間は過去と断絶せず、時計という道具から告げられるものでもない。悠久の時の流れと一瞬を刻む時刻との違いがあるが、ユングによれば、ヨーロッパ人はヨーロッパの持続性を喪失しているという。つまり、時間の感覚の相違には、過去との持続を自覚するか断続を自覚するかの違いがあると言える。また、ユングが旅で出会ったプエブロ－インディアンやアフリカの人々には、あるべきところにある人々の落ち着きと気品があった。

4.3. 神話の重要性

アフリカでもプエブロ－インディアン居住地でも、ユングが太陽神崇拝の現場に居合わせたことは、彼が太陽神崇拝が太古から行われてきたことを実感し、自分の集合的無意識の仮説の拠って立つ基盤を与えてくれるものであった。ユングは、西欧が近代化を成し遂げていく中で次第に底層へと押しやられていったものを含む、太古から脈々と受け継がれてきた集合的無意識の世界の存在を、実感したのである。特に重要なのは、ユング自身がそれらの地で太陽が昇る瞬間の神々しい場面を共に体験したことであった。前述のように、それはユングに聖なる時間と、時を超越した恍惚にひたる体験をもたらした。

ユングが旅で出会った世界は、まさに「神の国」[40] であった。ユングは、あるべきところにある人々の、気品と落ち着きを実感した。ユングは、気品と落ち着きあるその姿に、神話という存在の基盤を失ってしまった自分たちの姿について深く考えさせられた。ユングが、神という存在を失って久しいヨーロッパ人に「自己」という概念の重要性を訴えるのは、「自己」という存在自体が神話的役割をもつことを主張するからに他ならない。

4.4. 意識の重要性

ユングは、1956年の論文『現在と未来』[41] の中で、意識の重要性について、「意識というものがなければ実際上世界はない。世界は心に意識され、反映され、表されてはじめて存在する。意識は存在の一条件なのである」(ユング2001, p. 225) と述べている。この意識の重要性こそ、東アフリカのアスイ草原で一人になったユングが実感したことであった。さらにユングは、意識の担い手である個人の重要性についても強調する。同じ論文の中でユングは、個人の一回性について次のように述べている。

> 個人を特徴づけているものは、一般性や規則性でなく、むしろ一回性に他ならない。個人は繰り返しのきく単位 (Einheit) ではなく、一回かぎりの個物 (Einzelheit) として捉えなければならない。それは最後のところで比較を許さず、認識することもできない。(ユング2001, p. 191)

こうしてユングは、アフリカで体験したように無意識の世界に惹かれながらも、無意識を意識化するというその意識の働き、さらには無意識を意識化した個人の重要性を強調した。従って、ユングが述べる個人とは、近代的自我ではなく「自己」という中心をもった全人格的な存在なのである。

おわりに

ヨーロッパは、高度の文明化を成し遂げたと自負していた。そのヨーロッパが、第一次世界大戦を体験した。ユングはこの戦争の経験から、自身の内部に意識ではコントロール出来ないものを有した人間が、科学技術を手にしていることの危険を自覚した。これは、無意識を意識化せず放置する危険を自覚させるに足る経験であった。第一次世界大戦期は、ユングが「創造の病」を体験していた時期とも重なっていた。戦後スイス国境が開くと、ヨーロッパに重苦しい雰囲気を感じていたユングは、念願の非ヨーロッパ圏への旅をした。意識ではコントロール出来ない、それ自身自律性を持った無意識の存在を仮定するユングにとっては、この旅は、無意識の世界を体験する旅でもあった。これらの旅でユングは、ヨーロッパの一面的になりがちな意識をさらに広く拡大して理解し、創造性の源泉でもある無意識の力を実感した。

この「無意識の世界」とは、当時のヨーロッパ人が非ヨーロッパに見ていた、遅れたもの・劣ったものとしたものに他ならない。それが、ヨーロッパの一面性を補うものであった。ヨーロッパの自我中心主義、意識中心主義という一面性を補うには、ヨーロッパは自らの内にある、遅れたもの・劣ったものの意識化が必要であることを、ユングは身をもって体験した。このことが、ユング自身の脱中心化ではなかったかと考える。

今回取り上げたユングの旅は、その86年にも及ぶユングの人生のごく一部にすぎない。しかし、非ヨーロッパ世界での体験は、自身の思想・学問がヨーロッパの脱中心化につながるものとの確信を、ユングに抱かせる旅であったと考える。

今後は、さらにユングの思想形成を辿ることを通して、ユングにおける近代の相対化について考察を加えていきたい。

注

1）分析心理学（Analytical Psychology）とは、ユングによれば①「意識に関する科学」、②「無意識の心と呼ばれるものによって生み出されるものに関する科学」（ユング1990, p. 18）である。このような説明を行ったのは、1935年、タヴィストック・クリニックにおける講演の時点で、ユングは60歳である。分析心理学に限らず、心理学一般が対象とする心というものについてユングは、「心というものが、科学的な観察や判断の対象 object であると同時に、このような観察をする主体 subject であり、手段 means であるということ、そして、このことが一体何を意味しているのかということを十分把握するには、まだ薄暗がりのような状態であって、黎明はまだのようです」（ユング1990, p. 18）と述べている。この前提の上にユングは、分析心理学は基本的には自然科学であること、しかし他のどのような科学よりも観察者の個人的な先入観に影響されるものであることを述べている（ユング1977, p. 3）。さらに、分析心理学の歴史上の相対物が錬金術であることも述べている（ユング1977, p. 9）。精神科医アンリ・エレンベルガー（Ellenberger, Henri F 1905－1993）によれば、分析心理学の広汎な体系をもれなく展望するのは困難であることを断った上で、その主要な点として心的エネルギー論、無意識と元型、人間の心の構造、個別化、夢、精神病と神経症のユング的考え方、を挙げている（エレンベルガー 1997, pp. 339－349）。

2）カール・グスタフ・ユングは、スイスの精神医学者。ボーデン湖畔のケスヴィルに、プロテスタント牧師の子として生まれる。バーゼル大学医学部卒業。分析心理学の創始者である。分析心理学は時にユング心理学とも呼ばれるほど、ユング自身は精神医学者としての側面が有名であるが、本稿では思想家としてのユングを検討した。

3）自己（self）とは、分析心理学の中心概念の一つで、「単に中心というだけではなく、意識も無意識も包括すべく、全体を囲い込む。すなわち、自我が意識的な心の中心であるように、自己はその全体の中心である」（サミュエルズ2001, p. 65）。

4）集合的無意識（collective unconsciousness）は普遍的無意識とも訳されるが、本稿では集合的無意識を用いている。意識という識閾を通して意識に入り込んでくる無意識の産物には二種類あり、個人的起源のものを個人的無意識（personal unconsciousness）とし、この内容は個人的に獲得されたものかあるいは本能的衝動仮定の産物であり、忘却や抑圧されている内容、創造的内容を含む。しかし、ユングはさらにその下層に起源が不明かあるいは個人的に獲得されたものとは決して見なせない神話的特質（従って、人類一般に属する）といった内容の領域を、ユングは集合的無意識（普遍的無意識）とした（ユング1990, pp. 63－65）。この領域は、「人類の無意識の領域であり、そこではわれわれすべては同一」（ユング1990, p. 70）である。

5）個性化（individuation）とは、「個人が自分自身になること。つまり、自らの存在が不可分、全体的となり、かつ他の人々や集合的な心理状態から区分されていることである。（ただし、他者や集合心理との関係性ももちつづける）」（サミュエルズ2001, p. 52）のである。

6）ユングがグノーシスや錬金術について研究したことの意義については、湯浅泰雄『ユングとキリスト教』（講談社、2000）、同じく湯浅泰雄『ユングとヨーロッパ精神』（人文書院、1979）に詳しい。湯

浅泰雄は、西欧の精神史には正統的表面流と異端的底層流があり、ユングが注目するグノーシスや錬金術といったいわば「影の精神史」が、西洋精神史の全体像の再構成に不可欠であると述べている（湯浅、2000, p. 347）。ユングにとって、このグノーシスと錬金術の研究は極めて重要だった。それは、ユング自身が自伝で「錬金術との対比の可能性と、グノーシスにまでさかのぼる不断の知識の鎖は、私の心理学に骨子を与えた」（ユング1977, p. 9）と述べていることからもうかがえる。つまり、ユングは、精神科医としての臨床及び自身の体験から収集した空想の心像、経験的要素及びそれらからユングが引き出した結論をグノーシスの古いテキスト内に見出し、それら心的内容が歴史的展望の中で見ると何を意味するかをユングは理解していったのである（ユング1977）。ユングの錬金術研究に決定的な役割を果たしたのが、古い中国の書物『太乙金華宗旨』との出会いで、これは1928年に中国学者のリヒャルト・ヴィルヘルム（Wilhelm, Richard 1873－1930）がドイツ語に翻訳した『太乙金華宗旨』への序文を、ユングに依頼したことがきっかけとなっている（エレンベルガー 1997, pp. 357－358、ユング1977, p. 280）。その後（1929年）、この『太乙金華宗旨』について二人は共同研究を行っている。ユングとヴィルヘルムは、すでに1920年代の初めに知り合っており、ユングは1923年（ユング自伝では1922年になっている：ユング1977, p. 237）に、彼をチューリッヒ心理学クラブでの講演に招いている。ヴィルヘルムは、ドイツの宣教師・中国学者で、青年時代に中国（青島）に派遣され、帰国後フランクフルト大学教授となり「中国研究所」を設立している。

7）（注8参照）

8）ユングが分析心理学と錬金術の対比可能性について述べる際の錬金術とは、「科学的観点ではなく、象徴という観点」（サミュエルズ2001, p. 170）に立った見解である。ユングは錬金術研究を続ける中で、錬金術師たちが象徴を使って語っていることに気づく。この象徴こそ、ユングが患者との関係、また自らの内的世界への取り組みの中でなじみのものであった。さらにユングは、錬金術師たちが行う物質の変容作業が、彼らの心の変容過程を示していることにも気づいていく。ユングのこの発見が、「私の集めた空想の心像や経験的な要素、そしてそれから引き出した結論」（ユング1977, p. 9）に歴史的な基礎を与えたのである。

9）創造の病（creative illness）とは、エレンベルガーが述べているもので、ある観念に激しく没頭し、ある真理を求める時期に続いておこるものである。創造の病の特徴としては、抑鬱状態、神経症、心身症、果ては精神病という形をとりうる一種の多形的な病である。正常な職業活動や家庭生活と両立していることも少なくないが、本人は完全な孤立感に悩む。病気の終結は急速で、当人は人格に永久的な変化を起こし、自分が偉大な真理、新しい一個の精神世界を発見したという確信が見られる。シャーマン、各種宗教の神秘家、一部の哲学者、創造的な作家にも見られる。エレンベルガーは、これがフロイト、ユングにも見られたとしている（エレンベルガー 1997, pp. 35－36）。ユングにおける「創造の病」は、1913年から1919年にかけての時期であった（エレンベルガー 1997, p. 305）。

10）ユング1977, p. 12, p. 14。

11）ユング思想の源泉については、ロマン主義の影響、中でもロマン主義の哲学、自然哲学、心理学の影響が指摘されている（エレンベルガー 1997、林1998、上山1986a、1986b、1986c、1989）。ユングの先駆者としては、カール・グスタフ・カールス（Carus, Carl Gustav 1789－1869）、アルトゥーア・ショーペンハウアー（Schopenhauer, Arthur 1788－1860）、エドゥアルト・フォン・ハルトマン（von Hartman, Eduard 1842－1906）がいる（エレンベルガー 1997, pp. 364－369）。なお、ユング自身は、カール・グスタフ・カールスを自らの先駆者として随所で言及している。

12）精神分裂病（schizophrenia）とは、初め「早発痴呆」と呼ばれ、ユングのブルクヘルツリ精神病院時代の上司であったオイゲン・ブロイラー（Bleuler, Eugen 1857－1939）が1908年にSchizophrenien（精

神分裂病）を提案し、「早発痴呆」は廃止された。
(http://www.jspn.or.jp/05schizophrenia/schizophrenia04.html)
現在、精神分裂病については「統合失調症」が用いられるため、本稿では精神分裂病（統合失調症）と表記する。なお、DSM-Ⅳの日本語版では、精神分裂病となっている（米国精神医学会編1998, pp. 119－128)。

13) この箇所で述べているユングのブルクヘルツリ精神病院時代については、主にエレンベルガー 1997, pp. 299－306によった。

14) ユングの読書範囲は、哲学者、神学者、神秘主義者、東洋学者、人類学者、小説家、詩人などの著作に及ぶ（エレンベルガー 1997, p. 366)。

15) 元型（archetype）について、ユングはこの語の由来を聖アウグスティヌスの「根源的イデア ideae principales」にあるとしている（ユング1990, p. 71)。元型は、こころの中の遺伝的に受け継がれた部分であり、本能に結びついたこころの行動を構造化するための型である。それ自体は表象不可能であり、表現形式を通してのみ明らかになる仮説的な存在である（サミュエルズ2001, p. 44)。

16) ユングは、1907年２月にウイーンのフロイト宅を初訪問している。「我々は午後一時に落ち合い、実に十三時間の長きにわたって休みなく話しつづけたのである」(ユング1977, p. 215)。

17) ユングが行った言語連想実験で見出された感情価を持つコンプレックスの存在が、フロイトの抑圧理論の証明になった（ユング1978, p. 213)。

18) 1913年１月３日付フロイトの手紙に、「こういう次第でわたしは、われわれの私的関係を全面的に放棄するよう提案します」(マグァイア1987, p. 339）とある。これについて、ユングは同年１月６日付で、「われわれの私的関係を放棄なさりたいとの御希望をお受けいたします」(マグァイア1987, p. 341）と返信している。しかしこの手紙の後も、学会の連絡といった事務的な手紙のやりとりは続いている。1923年の症例照会が、ユングからフロイト宛の最後の手紙である（マグァイア1987, p. 360)。

19) エレンベルガー 1997, p. 302。ユングはフロイトへの手紙の当初から、フロイトの性理論には疑問を呈している（マグァイア1987, p. 5)。

20) ユング1977, p. 275。

21) ユングは、この無意識との取り組みを、『自伝』の中で一つの章を設けて詳しく述べている（ユング1978, pp. 244－283)。この『自伝』によれば、フロイトとの訣別後に内的不確実感に襲われたユングは、理論的前提を一切もたず、成り行きに任せている。絶え間ない空想の流れが、ユングを襲った。ユングは、子ども時代に遊んだ石を使った建築遊び等を行う。決定的一歩は1913年12月12日、「突然、床が私の足もとに文字通り道を開いたかのようであった。私は暗い深みの中にとびおりていった」(ユング1978, p. 256)。その後続いた死と再生のドラマという幻覚や、６日後に見た夢により、ユングは「自我の意志よりも高いものが存在し、それに対して人は頭を下げねばならない」(ユング1978, p. 258）という洞察を得、ユング自身「実験」と呼ぶものに決着をつけている。

22) 曼荼羅（マンダラ）(mandala)、曼荼羅（マンダラ）図とは、「魔法円」を意味するサンスクリット語である。曼荼羅（マンダラ）は象徴的には円、四角形、四あるいはその倍数のものが対照的に配置されている図形で表され四を基礎とする傾向があり、花や十字、車輪の形をとる。この象徴形態は東洋のみならず西洋の特に中世に非常に豊富に見出される（サミュエルズ2001, p. 155, ユング1977, pp. 269－270)。ユングにおいては、曼荼羅（マンダラ）は中心、目標、心の全体性としての自己の象徴である（サミュエルズ2001, 155, ユング1977, pp. 269－270)。

23) エレンベルガー 1997, p. 308。

24) バーバラ・ハナー 1987a, p. 231。バーバラ・ハナー（Hannah, Barbara1891－1986）は、イギリスの出身で、ユング研究所の個人分析及び教育分析の教官を務めた。ユングの最も身近にいた人物の一人である。

25) (注6参照)

26) ユングの非ヨーロッパ圏への旅は、本文で触れた旅以外にも、1938年、ユング63歳の折訪れたインドへの旅がある。この旅は、インドのカルカッタ（現在のコルカタ）大学の25周年記念祭にイギリス政府からユングが招待された旅である。しかし、この旅の時点では、ユングは内的にも外的にも充実してきており、本稿で取り上げた旅と異なるため取り上げていない。

27) ユング1977, pp. 55－66。

28) ユング1977, p. 56。さらにユングは、「技術時代がイスラムの国にどのような影響を与えるのかは、今のところわからない」ユング1977, p. 56、とも述べている

29) ハナー 1987a, p. 236。

30) ユング1977, p. 63

31) ユング1977, pp. 66－76。この旅に同行したのは、三人のアメリカ人で、中の一人はプエブロ・インディアン居住地のあるニューメキシコ州をよく知っていた（ハナー 1987a, pp. 262－263)。

32) ユング1977, p. 194。

33) ユング1977, pp. 76－104。この旅は二人のアメリカ人と一人のイギリス人のお膳立てによるが、その中の誰もその地域についてはよく知らなかった。途中から、イギリス人の女性一人がこの旅に加わっている（ハナー 1987a, pp. 274－281)。

34) この旅程については、ユングがウガンダ（Uganda）からハンス・クーン（Kuhn, Hans）に宛てた、1926年1月1日付の手紙によって知ることができる。それによれば、1925年10月15日に英国を発ち、本文にあるルートを通って、11月12日にモンバサ（Mombasa）に到着している。2日後に列車で24時間の旅をした後、首都ナイロビ（Nairobi）に到着。さらに線路が途切れている所まで列車で行き、その後は100kmトラックで進んだ。その後は5日間歩いてジャングルの中を進み、ついにエルゴン山（Elgon）（あるいはマサバ（Masaba）山）の麓に到着。最終的なキャンプ地までは、12kmの登山をしている。また、1926年1月15日にエジプトへ6週間のナイル川を下る旅に出発し、4月初めには帰郷する予定であることをハンスに伝えている。手紙の受け取り人であるハンス・クーンは、ユングが建てた塔のあるボーリンゲン（Bollingen）地区に住む、当時16歳の少年である。ユングはこの少年に1922年に出会っている。ハンスは、ユングが塔を建てる際に手伝ったり、ユングの庭仕事、料理なども手伝った（アドラー 1973, pp. 42－44)。

35) ユングが既視感を抱いた風景とは、ナイロビへ向かう列車の中で朝目覚めたとき、「列車は赤い砂塵をあげて、赤い崖のそそり立つところを曲がったが、ちょうどそのとき、頭上を見上げると、断崖の尖端に黒褐色のすらっとした姿が動かないで立っており、長い槍によりかかり、汽車を見下ろしているのだった。そのそばには巨大な燭台のようなサボテンがそびえていた。私はこの光景に魅せられた」(ユング1977, p. 77)、という光景であった。

36) ユングが東アフリカの旅で得たものについては、ローレンス・ヴァン・デル・ポスト（van der Post, Laurens 1906－1996）も触れている（ヴァン・デル・ポスト1980, pp. 292－312)。ヴァン・デル・ポストは、アフリカがユングの集合的無意識の認識に決定的な確認を与えたと述べている。また、ユングが「アフリカから引き出した他の二つの個人的意義」として、(1)「その人間が取り組まなくてはならぬ材料は、もっとも近いところにあってごく自然に手に入る、(2)ヨーロッパ人が物質世界を旅行する動機の背後には、逃避の要素がある。旅のための旅とは、「現代の人間に要求されている、

自己自身の中の未知の世界への代用である」(ヴァン・デル・ポスト1980, p.303)、(3)ユングのアフリカでの経験に関する限り、アフリカ大陸とその住民がいかにヨーロッパ人を魅了するかを、ユングに教えた。なぜなら、「アフリカはその地理的特徴と実例によって、ヨーロッパ人の原始的自己において忘れられたものを刺激するからである」(ヴァン・デル・ポスト1980, p.303)、と述べている。ユングは、ヴァン・デル・ポストに会うことを楽しみにしており、二人は第二次世界大戦後2、3年経過した頃初めて会った(ハナー1987b, pp.181－182)。ヴァン・デル・ポストは、1906年南アフリカ生まれの小説家で、農業も営んだ。アフリカとイギリスで成人時代を送り、イギリス軍の軍人の経験もあり、一時日本軍の捕虜になった。1981年、ナイトの称号を受けている(van der Post1980)。ユングにとってヴァン・デル・ポストは、ユングのアフリカ体験やアフリカの問題について心から語り合える希な友人の一人であった(ハナー1987, p.181)。

37) 河合隼雄は、ユングにとっての非ヨーロッパへの旅が持つ重要性は、ヨーロッパのほとんどがその中心性を疑っていなかった1920年代に敢えてヨーロッパを離れたことにあるとしている。さらに、「ユングの脱ヨーロッパ中心性を確実にするために」(河合1982, p.86) 非ヨーロッパ圏への旅が役立ったと述べている(河合1982, p.85)。

38) 河合隼雄 1982, pp.84－86。

39) 河合隼雄 1982, p.84。

40) ユングがウガンダ鉄道の臨時の終着点で出会った、アフリカ在住40年というイギリス人のことばである。そのイギリス人は、ユングに「ここの国は人間のものではなく、神の国なのだ。だから、たとえどのようなことが起こっても、ただじっと坐っていて、心配することはない」(ユング1977, p.81)と、これだけを述べて立ち去るのだが、ユングはこの言葉に意味深いものを感じ取った。ハナーによれば、ユングは、アフリカでこの忠告によって大いに救われたことに非常に感銘を受け、「「無意識との対決」を貫徹しなければならないさだめに臨んでいた彼の弟子たち全てにそのことを伝えた。というのも、ジャングルや叢林で適用できることは、無意識にも適用できるからである」(ハナー1987a, p.287)。また、ここでの「神の国」を心理学の言葉で言うと「それは自己の国であり、自我の国ではないということになる」(ハナー1987a, p.287)のである。

41) 1956年の春に書かれ、1957年3月の『シュヴァイツアー・モーナーツヘフテ』の特別号に発表された。(ユング2001, p.310)。

引用文献

Adler, Gerhard (ed.)、C.G.Jung Letters Vol,1、Routledge & Kegan Paul、1973

有田忠郎、ユングと錬金術－若干の覚え書き、現代思想 臨時増刊 Vol.7－5、青土社、1980、pp.76－87

エレンベルガー、アンリ、木村 敏(他)監訳、無意識の発見－力動精神医学発達史(下巻)弘文堂、1997

ハナー、バーバラ、後藤佳珠(他)訳、評伝ユング1、人文書院、1987a

林 道義、ユング思想の真髄、朝日新聞社、1998

ヤッフェ、アニエラ、河合隼雄(他)訳、ユング自伝1－思い出・夢・夢想、みすず書房、1978

ヤッフェ、アニエラ. 河合隼雄(他)訳. ユング自伝2－思い出・夢・夢想、みすず書房、1977

ユング、カール グスタフ、小川捷之訳、分析心理学、みすず書房、1990

ユング、カール グスタフ、松代洋一編訳、現在と未来－ユングの文明論、平凡社(平凡社ライブラリー971)、2001

河合隼雄、光芒の1920年代16 －ユング 内的世界への旅と非ヨーロッパ圏への旅と、朝日ジャーナル、朝

日新聞社、1982
マグァイア、ウイリアム編、平田武靖訳、フロイト／ユング往復書簡集上巻、下巻、誠信書房、1987
サミュエルズ、アンドリュー（他）、山中康裕（他）訳、ユング心理学辞典、創元社、2001
ストー、アンソニー、山中康裕監修. 菅野信夫（他）訳、エセンシャル・ユング、創元社、2002
Van Der Post, Laurens、Jung and the story of our time 、VINTGE（VINTAGE CLASSICS)、2002
ヴァン・デル・ポスト、ローレンス、秋山さと子（他）訳、人と場所－ユングとわれわれの時代の物語、現代思想 臨時増刊、Vol. 7－5、青土社、1980、pp. 292－312

C.G.Jung's voyage outside Europe
— Attempting the relativity of modern Europe —

HAMASUNA Mari

Carl Gustav Jung, the pioneer of Analytical Psychology, took a voyage to North America and Africa in the 1920's, when Europe's superiority was unquestionable.

While European people believed in the theory of ego-consciousness, Jung brought forward the concept of the Self , and he attempted the de-centralization of European thought.

In his journey to both North America and Africa, Jung realized (1)the importance of viewpoints different to Europe, (2)the varied perception of time, (3)the value of myths, (4)the importance of consciousness.

Through Jung's attempt to de-centralize European thought, it is possible to get a relative viewpoint of modern European thought.